

幼稚園教育実習についての一考察

— 江戸川大学こどもコミュニケーション学科一期生の実態から —

浅川 陽子*・猶原 和子**

1 我が国の幼稚園教育実習について

幼稚園教育実習は、幼稚園教諭免許状を取得するために、「教育職員免許法」及び「教育職員免許法施行規則」に基準が示され、単位習得が要求されている必修科目である。その法的根拠にしたがい、計画・実施する必要がある。

幼稚園教諭は、学校教育法第27条で「幼児の教育をつかさどる」と規定され、これには、大学院修士課程で習得する専修免許状、4年制大学で取得する一種免許状、短大や専門学校で取得する二種免許状の3種類がある。いずれも教育実習5単位が必要である。

教育実習では、大学で行う教育実習に係わる「事前及び事後の指導」と、学外（園）での「実習」を合わせて5単位を修得することとなっている。これを在学中のいつにするのか、集中して行うのか、分散するのかは大学（養成校）の判断に任せられるところである。

実は我が国での教育実習の歴史は、1949年（昭和24年）に教育職員免許法が制定されたときに始まる。1988年（昭和63年）に免許法の一部改訂により、「教育実習の事前・事後指導」が単位化された。さらに現在、免許法の改定に伴い大学教職課程の見直しが全国規模で進められている

が、本稿では2014年度入学生に実施した学科の学修について検討することとする。

現在の教育実習は、事前事後学習を含め現場での「観察・参加・実習」を核にした総合的な学習として捉えられ、法的・制度的には、学外（園）での実習（体験）重視の方向が打ち出されている。

江戸川大学メディアコミュニケーション学部こどもコミュニケーション学科では、4年間の学修により幼稚園教諭一種免許状と保育士資格を取得できるカリキュラムとなっている。

一般的に、現場では保育者と言うことが多いが、法令上は「幼稚園教諭」であり、文部科学省関係の文書の中では「教師」という呼び方もするため、本稿でも教諭または教師と記述することとする。

2 本学科における教育実習について

2014年4月に本学メディアコミュニケーション学部「こどもコミュニケーション学科」が設立されて4年目になる。2014年度入学の一期生が今年度、学科として初めての教育実習に臨んだのである。計25名の学生を送り出すことができた。

こどもコミュニケーション学科では、保育士資格と幼稚園教諭一種免許状を取得することができるため、両方を取得しようとする学生は3年次に保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、合わせて12単位を取得し、4年次教育実習に入ることになる（Ⅱ・Ⅲについてはどちらかを選択）。

そして、それらの法定実習に取り組む前に、本学科では1/2年次に多様な「体験学習」（保育所体験・養護施設等の見学・幼稚園での観察や体験）

2017年11月30日受付

* 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科教授 児童教育、教師教育

** 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科准教授 音楽教育、初等教育

を単位外として全員に課している。

したがって4年次の教育実習に至るまでに、学生はさまざまな保育現場体験を積む。そのプロセスで、自らの適性や将来像を見据え、保育士・教師以外の進路を選ぶ場合もあり、また、進路について迷ったり考え直したりする学生も意外に多いというのが実情である。

ここで私達の研究動機を記す。それは「初年度生への（保育教育関連）体験学習や実習事前事後指導の内容や方法は適切であったか」という問い（自らへの問い）である。学科創設から保育教育実習担当の関係教員で話し合いながら手探りで進めてきた「体験学習（1/2年次）」や「事前学習（3/4年次）」であるが、その成果と課題を一期生対象の初回が済んだ今だからこそ整理しておきたいと考えたわけである。

課題の分析等に関しては、学生の書き言葉やレポート等の記録、園からのアンケート等を根拠とするため、客観性や一般性に欠ける可能性はあるが、少なくとも現状の理解・確認のためには有用であると判断した。

さて、翻って、江戸川大学の教育理念は、「人間としての優しさに満ち、普遍的な教養と時代が求める専門性により社会貢献できる人材の育成」すなわち「人間陶冶」である。本学科では、この建学の精神のもと、以下の教諭・保育者養成をめざしている。

【めざす保育者像】

- 豊かな人間性を基礎に、子どもの教育と福祉に使命感や情熱を持ち、探究力を持ち、学び続ける保育者
 - 子どもの教育と福祉に関する高度な専門知識・技能を備え、子どもの最善の利益を追求し、成長を支えていくことのできる保育者
 - 自らのコミュニケーション能力や対人関係能力をより一層高いものとし、同僚、保護者・保育支援関係者との協力関係を構築できる保育者
- そして、具体的な単位数と実施学年・時期については本学科では「教育実習事前・事後指導2単位」を3年次後半（1月）から4年次前期に、

「教育実習（幼稚園・こども園）4単位」を4年次5月～6月に実施している。

実習の1単位は30時間であり、4単位120時間を15日間（3週間）で学外園にて体験する。まとめて実習するか、時期を分けたり、さみだれ式に行うかは、養成校（大学）によって判断は異なるが、本学科では4年次前期に集中して3週間の教育実習を実施した。

【教育実習の目的】

教職課程で学んできた事柄を実際の教育・保育の場で経験し、幼児教育の意義について体験的認識と理解を深め、教師としてのあり方を学ぶ。

【教育実習の到達目標】

- 実習園において適切に教育・保育活動に参加できる。
- 実際の場で経験し、教育・保育の意義や教師のあり方について理解できる。
- 実習終了後に、実習を総括し、プレゼンテーションできる。

【教育実習の内容】

教育実習は、本学科における実習の総仕上げの活動体験である。全実習時間120時間のうちおよそ観察実習約75時間、部分・全日実習約45時間とし、保育カンファレンスへの参加、短期指導計画や指導案作成、園務への参加などを含む。

【教育実習の履修資格】（2017年度版）

4年次の教育実習（幼稚園・こども園）を履修するためには、以下の条件を満たす必要がある。

- 次の科目（合計21科目42単位）を修得
 - こどもコミュニケーション論、コミュニケーションの心理学、こどもと読み聞かせ・児童文学
 - 保育の心理学、保育内容総論、人間関係、言葉表現（制作）、表現（音楽）、健康、環境、教育学概論、保育課程論、教育方法学（初等）、教育制度論（初等）、保育者論、声楽表現の技術A
 - 器楽表現の技術A/B、絵画表現の技術A、造形表現の技術A
- 出席状況が良好（3分の2以上の出席）である

こと、また、学科で定めたすべての体験学習を終了していること等

これら定め目的は、学生の規則正しい学習・生活態度及び保育技能向上を担保するためである。

3 「事前指導」以前の本学科独自の体験学習

事前事後学習（教職科目）法定の1単位に加えて、本学科独自の試みとして1年次後期（2月～3月）に幼稚園1日体験学習、2年次後期（2月～3月）に幼稚園3日体験学習を課している。どちらも学生が自己開拓した園で主体的に体験を通して学ぶことが目的である。本実習と同様の記録用紙や出勤簿を使い、実地で練習する。

また、それらの幼稚園体験以外にも1年次で児童養護施設の見学や、2年次での保育園5日体験など、保育士資格取得に係わる内容の「体験学習」を必須として位置づけている。

現在これらは科目として単位化されていないが、学生はレポートや報告等きちんとして終了しなければ、本実習に進めない。すなわち「本実習」以前の「各種体験学習」が本学科では極めて重要視されているということである。

このように、本実習に進む前に、さまざまな職場（保育教育関係）での体験を重ねることによって、学生には保育教育職の大変さだけでなく、意味や魅力を感じ取ってもらいたいと私達は考えている。このことは、近々文部科学省が教職課程に「学校体験学習（学校インターンシップ）」を位置づけるとしている方向と趣旨や目的は近いと捉えている。

しかし、学生の現状は、職場に身を置く体験により、その職の「魅力」よりも「困難さ」の方を感じ取り、やっていく自信や前向きなエネルギーを持ち得なくなり「弱音をはく」傾向にある。もともと基礎学力に弱さがあり、コミュニケーション

ンに不安を抱く学生ほど、「体験を通して学ぶ」ことにハードルが高いようである。また自己表現への積極性が乏しくなりがちである。その点については後に詳しく考察する。

4 4年次「教育実習事前・事後学習」科目について

【この科目の到達目標】

- 幼稚園教諭として幼児教育に関する知識を深め、指導案作成など教育実践及び教育実践研究にかかわる基礎的な能力を身につける。
- 教育者としての愛情や使命感を深め、教育実習生として遵守すべき義務などを理解する。
- 教育実習を通して得た知識や体験をふり返り、教員免許取得までに自己改善する態度を身につける。

この科目はこどもコミュニケーション学科のディプロマポリシーと関連し、「子どもの発達を見据え健全な成長を導く能力を育む」ものである。

【この科目の授業の概要】

教育実習は、観察・参加（部分実習）・責任実習という方法で教育実践に関わり、将来教員になるための知識や技術を磨き、自分の適性や課題を自覚する機会であるが、事前学習では教育実習生として学ぶ態度や責任について理解し実習への意欲を高めることとする。

さらに事後学習では体験を丁寧にふり返り、教員免許取得までにさらに習得すべき技能や知識等を理解し、自己努力を続ける態度を養うこととする。

【この科目の学生に対する評価方法】

授業中の発言や質問および事前提出物 50%、事後の報告レポートおよび最終まとめ 50%をもとに総合的に評価する。

回	1期生に向けて教育実習事前・事後指導の内容概要（2017年度）
1	幼稚園教育実習とは一意義・目的『教育保育実践ガイドブック』に沿って
2	幼稚園教育実習で求められるポイント（上記と同様、教科書利用）

3	実習園における実習計画・各自の実習園の調査（レポート宿題）
4	幼稚園におけるデイリープログラム（日課表）活動の特徴・遊びと指導の意義
5	幼稚園実習の内容①観察実習（ビデオ 20 分を視聴し解説）
6	幼稚園実習の内容②部分実習・全日責任実習・実習生のあり方（上記と同様）
7	指導計画案書き方のポイント（部分実習 2 つ・責任実習 1 つの指導案宿題）
8	指導計画案の個別指導及び実習日誌書き方のポイント①時系列形式②エピソード形式
9	事後学習その 1 個人・グループ（各自ふり返り記入：お礼状等。ラウンドテーブル方式による報告）
10	事後学習その 2 個人・グループ（1000 字レポート宿題及び 500 字：下学年に伝える事）
11	事後学習その 3 個人・グループ（レポート相互交流・学びの自覚化）
12	事後学習その 4 全体報告会の検討（パワーポイントによる発表資料作成）
13	事後学習その 5 全体報告会の準備（共通・個別の課題の洗い出しと深化）
14	事後学習その 6 全体報告会の実施に向けて（個人学習と指導）

5 「事前学習」でみえた、学生の不安要素

教育実習に行く前に不安に思うことを学生に具体的に挙げさせてみたところ、一番多かったのは「責任実習」と「先生方とのコミュニケーション」であった。

二番目に「発達にあう遊びができるか」「部分実習」「実習生としてどこまで関わるか」。

少数だが「こどもと仲良くなれるか」「休まず行けるか」「担任の保育計画の理解」などもある。

これらは実習生の不安として当然予想され、また理解できることであり、ここから事前の対策として必要なことも見えてくる。

第一に、「責任実習と部分実習で試みたい内容を明確にもたせること」、第二に「先生や子どもたちから学ぶという意識を徹底すること」であろう。私たちはそのように考えて、事前学習の力点をそこに置いたつもりである。

しかし、第 1 回～第 3 回を 1 月に、第 4 回～第 8 回を 4・5 月に行うという年度をまたいでの指導となったため、継続的な実力アップにはつながりにくかった。

実習に対する学生の不安を解消しつつモチベーションを高めるためには、「事前学習」の内容も

さることながら、いつ行うかという点も見直さなければならぬだろう。

さらに、現実的には、実習が実際に始まってから、ようやく自分の事前準備の不足に直面して、教員に助けを求めてくるケースも多々見られた。

したがって、教育実習期間中の土日は、学生相談対応となる。実習担当教員の水面下の多忙は、やむを得ないとはいえ、かなりの負担となる。

ただし、机上の事前学習ではなかなか気づけないことも多い。学生の実態に沿って指導や援助を行うことが肝要であるが、学生が少しずつでも自信をもって、自分で考え判断できるよう自立・自律を促す指導姿勢が、教員には求められるだろう。

幼・小の教育の現場では、臨機応変に心のこもった指導や援助ができる教師、子どもとともに考え工夫できる教師が必要とされている。実習前や実習中の、大学側からの指導も、学生の不安要素こそが学びの芽であると考え、育てたい人材理念や考え方を共通をもって実施することが大切であろう。

6 実習園からの「事項別評価」について

学生の教育実習をお願いした園には、3 週間の実習における「学生に対する評価」を、所定の評

評価に基づいて最終的に記入してもらった。

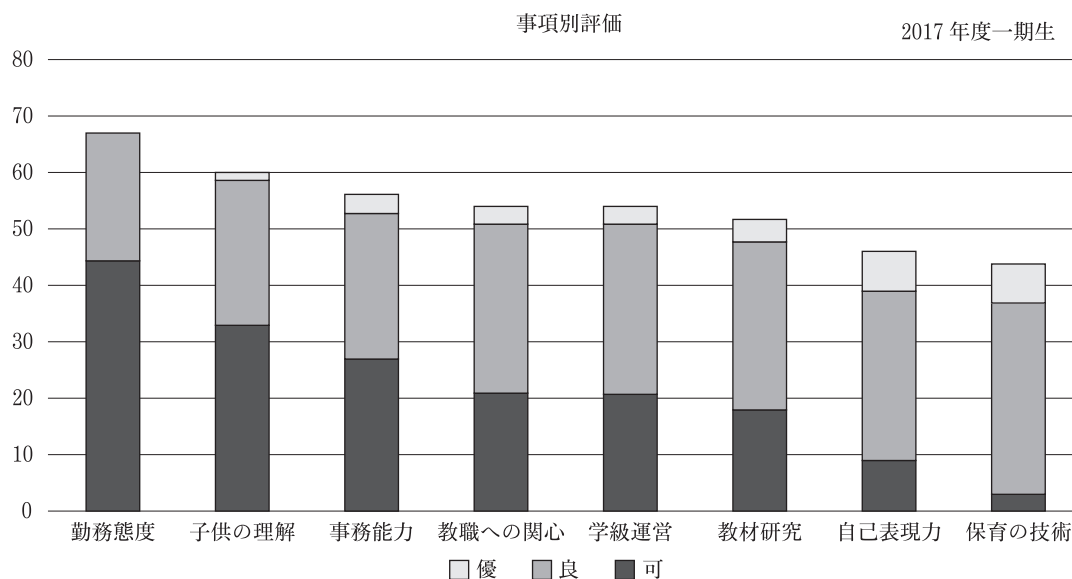
勤務態度・子どもの理解・事務能力・教職への関心・学級運営・教材研究・自己表現力・保育の技術という8つの事項別評価とともに、総合所見と総合評価（A～Eの5段階評価）がつく。

学生には、実習後に届いた、園からの評価票を参考にしながら、口頭での内容伝達を行い、自己

改善の視点を形作るように働きかけた。

なお、教育実習そのものの全体評価は、実習園からの評価票をもとに、学科会議で審議して総合的な判断のもとに決定した。

次に示すものは、実習園からの実習学生に対する「事項別評価」をまとめたものである。



この表は、事項別評価で学生たちが得た優（3点）良（2点）可（1点）を、事項別に学生たち全体の総得点を出し（縦軸）、得点順棒グラフにしたものである。

結果を見てみると、学生の真面目な勤務態度について、高い評価を受けている。全員が優・良である。子どもの理解についてもほぼ評価は高い。

一方で、自己表現力と保育の技術については、評価総得点が低い。可（努力を要する）の割合も高くなっている。

ここに、私達の学生指導全体への反省点や示唆が読み取れる。それは、学生の「表現力」を意識的に育て高める必要があるということだ。

つまり、今まで以上に自分の考えや思いをことばや行動で表す「自己表現」の機会を増やすことが重要であろう。また、保育技術の引出しを増やすために、自ら保育の技術を身につけようとする「探求力」という内面の育ちを、ていねいに見て

いかなければならないだろう。

7 授業計画の改善版を考える ～PDCA サイクルの実現へ

一期生への「事前事後指導」2単位の内容について改善を試みる。以下にそれを記す。

第1回：幼稚園教育及び教育実習の目標や意義を理解し、自分自身の実習の目的を考える。

第2回：教育実習オリエンテーション時に留意すべきこと、挨拶の仕方や実習生心得について理解する

第3回：幼稚園教育要領改訂の経緯を学び「幼児期の終わりまでに育てたい姿」などについて理解する。

第4回：幼稚園や認定こども園の組織や校務分掌、実習園の教育目標について調べたり話し合ったりして理解を深める。

第5回：実習日誌記録の記入方法を理解する。
(1)時系列記録，主活動の書き方，その日の考察など

第6回：実習日誌記録の記入方法を理解する。
(2)エピソード記録，教師の言葉かけ，保育室環境構成など

第7回：指導案の作成(1)部分実習指導案を3つ以上作成し，こどもの発達や教育的ねらいを考える

第8回：指導案の作成(2)責任実習指導案を作成し，製作の際の準備などについて具体的に考える

第9回：教育実習を終えて日誌のまとめと提出や礼状の送付など実習生としての体験のふり返りを始める。

第10回：教育実習の報告レポートの作成

第11回：報告会(1)レポートをもとにラウンドテーブル報告会を行い，学生相互の学びを共有する

第12回：報告会(2)ラウンドテーブル報告会を行い，下学年に伝えたいことや新たに増えてきた自己の課題（免許取得までに習得すべきこと）を考える

第13回：最終まとめの作成(1)教育実習を通して得た学びを総合的に把握し，各自PCパワーポイント（情報機器活用）で整理する

第14回：最終まとめの作成と提出(2)教育実習を通して得た学びをもとに，自己改善の視点をもち

8 今年度の「事後学習」の中での 学生の変容

(1) ラウンドテーブルでの学び

では，学生自身はどのように実習を受けとめたのだろうか。

事後学習では，まず振り返りシートに個人が記入することを求めた。そこで態度面や知識・技能，自己コントロール，実習中の取り組みなどについて問うたところ，全般的に「よくやった」「頑張った」と記述する学生が多かった。日誌の書き方や子どもへの声のかけ方，ピアノに向かう姿勢につ

いて指導された者がいたにも関わらず，実習までの準備を自己採点する項目では，8割の学生が7点以上に評価し，満点をつけた学生も10%いた。「やり終えた」という達成感で自分に満足している様子が見ええる。

しかし，その後に行った「ラウンドテーブル」では，彼らに変化がみられ始めた。少人数で自らの経験をたっぷり語り合い，聴き合うという活動の中で，彼らは，園や教師による保育の違いや担当した年齢による子どもの反応の違いに驚きながらも，互いの経験を共感的にうなずいたり，質問したりして寄り添って聴き合っていた。

特に，子どもや保護者からの直接得た反応に対しての喜びは強い。

苦手なお肉がかみ切れず，毎日泣いている子がいて，教師とともに，ずっと励まし応援続けた。実習最後の日，泣かずに食べることができ，嬉しそうに私に「泣かなかったよ」と言いに来た。その子が一つ自信を持ったように思った。(K)

Kは，流暢に語るタイプではなく，ピアノも苦手で，実習への不安を抱えていた。しかし，園がギターでの弾き語りを快く受け入れてくださったことで，安心して子どもに向かい始めた。彼は，気になる子どもに対して毎日行った，自分の励ましが報われて，「泣かずに食べる」という行動を生み出したことを喜びつつ，「一つできるようになることが子どもの成長を促し，自信を持たせる」ことに気づき，そのことを仲間と語っている。

『とこちゃんのながぐつ』という絵本を読み聞かせた翌日，ある子どものお母さんが話しかけてきた。「うちの子は，雨の日に長靴やレインコートを身につけようとしなかったのですが，突然『今度から履く！』と言ったんです。S先生が絵本を読んでくださったことに影響を受けたようです」と言ってもらえた。(S)

Sは季節に関わるものをもって選択した絵本が，予想外に一人の子どもに大きな影響を与えたことに驚き，喜ぶとともに，そこから「教師の役割」について仲間と考えることにつながった。

一方、自己評価が5点と低かったBは、技術や自己表現力が弱いことを指摘され続けて、苦しかったことを語るとともに、「トラブルが起きたときに『ごめんね』『いいよ』ですべて済ませるのはいいのか」という自分が納得できなかった疑問を仲間へ投げかけた。これをきっかけに、それぞれの体験に基づいた話し合いが進んだ。自分が「否定された」と感じた出来事に関して、異なる指導を受けた学生の体験などを聴く中で、Bの表情が少し和らいでいくのが印象的であった。

ラウンドテーブル後には、次のような感想が挙がった。

- ・園によって方針が全く違うことが改めてわかった。それぞれの園の雰囲気を感じられてよかった。
- ・みんなそれぞれに思うことがあって、そこから学ぶことが大きく、共感できる部分もたくさんあった。
- ・自分の実習を語ろうとする中で、大変だったことや楽しかったことをたくさん思い出し、自分の実習をもう一度振り返ることができた。
- ・いろいろなエピソードを聴く中で、子どもへの声掛けや働きかけ方など、なるほどと新たに学ぶことができた。またみんなのことも少し知ることができた。

自分一人だけでは考えなかったことに気づくことができたり、語るという行為の中で自分自身を異なる視線で受けとめ始めたりしたことがみえてくる。一人の経験ではわからなかった世界を、他者と共振して受けとめることで、学びが深まったのだと考えられる。

(2) 下級生を意識する中での変容

ラウンドテーブル後に、最終レポートと、報告会用のパワーポイントを個別に作成した。注目したのは「下級生に伝えたいこと」に書かれた内容である。

- ・ピアノの練習毎日コツコツとやることが大切。
- ・笑顔であいさつしよう。
- ・子どもとたくさん遊ぶ。
- ・日誌や指導案は丁寧な字で細かく書こう。
- ・指導案はいろいろな子どもの姿を思い浮かべて幾つも用意する。

- ・わからないことは積極的に質問する。

上記のような内容は、実習以前に、様々な授業の中で指導されてきたことである。しかし、なかなか必要性を意識することがなかなかできないままに実習に向かった学生も多かった。ラウンドテーブルを経て、また、下級生というはっきりした相手を意識したときに、最初に自己評価の高かった学生も、自身の失敗や反省をきちんと綴り、「他者へ伝える」という形で、自分の課題に向き合えることができた。

次は、パワーポイントにまとめた例である。それぞれが、体験をもとに、自分の言葉で表現しようとしていることがわかる。

下級生へ

- ・保育所実習とは全く異なり、幼稚園教諭は、子どもにどんな風に育ってほしいか願いや、ねらいがはっきりとしていて、製作、遊びでも、どの活動にしても教諭にはねらいがあり、達成するための計画もあるため、そのねらいを実習生も汲み取って、実習に取り組むことで見えてくるものも違うと思います。

教諭のひとつひとつの言葉がけや行動には意図があることも実際に見て感じました。

責任実習も自分が子どもの前に立った時、どのような事、子どもの動きが考えられるかを、できる限り考えておくことで、実際に前に立った時、自信や安心感をもって臨めると思います。

下級生へ

- ・沢山の疑問を持つこと
- ・積極的に挑戦すること
- ・日々目標を持って取り組み、反省を生かすこと
- ・事前にきちんと準備をしておくこと
- ・日誌は丁寧に誰が見ても読める字で書くこと
- ・ピアノの練習をしっかりとしておくこと
- ・実習生らしい身なり態度で臨むこと
- ・「実習」を楽しむこと！！

下級生へ

- ・部分実習でも責任実習でも緊張するからピアノや絵本の読み聞かせなどたくさん練習をしたほうがいい。
- ・実習生として挨拶やマナーなどはしっかり行う。(挨拶は元気よく！)
- ・ねらいをたてる際に子どもの何を育てたいのかということをしっかり考える。
- ・子どもと遊びをする際に、子どもに合わせて手を抜いたりするのではなく、全力で遊ぶことが大切。
- ・日誌は誰が見ても読める字で丁寧に完成させる。保育者の配慮などを特に詳しく書けるように注目して見ておく。



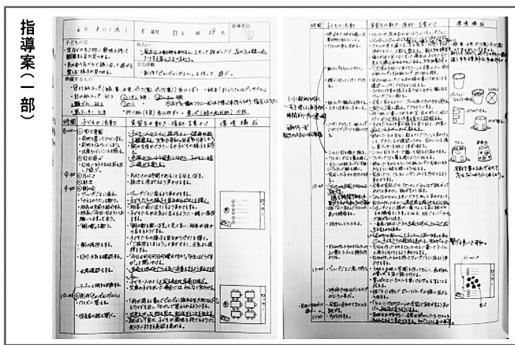
(3) 下級生との交流による学び

11月に、2年生に向かって体験を語る場を設定した。幼稚園3日体験先を探す直前の学習として適すると思ったからである。

発表の中では、実際の下級生を前に、幼稚園選択や責任実習について生々しい体験が熱く語られた。

Uは、園によって方針が異なるので、一日ボランティアで幾つも見ること勧めた。彼女自身は自由保育の園で、異年齢・協力担任の形の保育で実習を行ったが、ラウンドテーブルで小学1年生以上の学力を目指す園や、規律の厳しい園で実習を行った仲間の報告を聞いたからである。Wは、自身の経験から、「3日体験はあくまで体験で、実習で先生方が求めるものは全く違う。母園なら楽だという甘い考えをもたないこと」を強調した。

もう一つ2年生が驚いたのは、指導案について語られた時であった。



指導案の例 S

「私は責任実習案を8枚書きました」というWの言葉に、教室は「えー!」と、どよめいた。さらにUは、「一つの活動に対して子どもの反応を、少なくとも6通りは考えた」と述べた。2年生は、「実際にやったことや、指導されたものを違う色で記入しておく、あとで自分の役に立ちます。環境設定もできるだけ書いておく」といいます」というSの言葉を聴きながら、食い入るように指導案を見つめていた。

また、「私はピアノに自信がなかったので、先生に頼んで、毎日伴奏させてもらいました。そのために毎朝30分早く幼稚園に生き、ピアノの練習をしました」という言葉にも驚いたようである。

- 今までぼんやりと考えていましたが、ピアノや指導案について、もっとしっかり学ぼうと思いました。
- 公務員に興味を持っていたので、実感のこもった話が聞けてよかった。
- 3日体験は近くでいいやと考えていたが、園の方針などをしっかり読んで、選択することが重要だと思った。
- 母園で実習をと考えていたが、もう少し、知らないところで学んでみるのもいいな考えるようになった。
- 私なら、やらなくて済むならラッキーと思うのに、朝早くから練習して、自分からピアノの伴奏させてもらうなんてびっくりした。もう少し積極的に授業に向かう。

4年生は2年生を意識して、より伝えるべき内容を精選し、わかりやすい実例を加えて語ろうと心掛けた。また、2年生にとって、これまでと違った視点で幼稚園実習を考えるきっかけとなった。

このように、名前は知らないけれど、同じ科に属した「身近な他者との対話」は、お互いに親近感をもたらし、双方にとって意味ある学びになったと考える。

9 まとめ — 実習以前の「体験学習」の在り方について —

一期生ということもあり、実習以前の体験指導計画内容は手探りで作成されたものである。今回、始めての実習を終えて、実習前の取り組みについて振り返ると、幾つか課題が見えてきた。

① 1日体験→3日体験→本実習という体験の積み重ねの見直し

本学科では、体験日数を増やしながら練習し、実習に備えるという考え方で、カリキュラムを構成している。しかし、実習後の振り返りにもあったように、3日体験と実習では、受け入れてくださる園も異なり、意識も異なる。幼稚園は園によ

で、目指す子ども像も、保育方針も異なりが顕著である。

学生の言葉にもあったように、ボランティアとして、多様な園を体験するという変更も一考の余地がある。1年生での体験が実感の伴うものなのか、一斉に大学で期間を含めて設定する必要があるのか、2年生での3日間体験より3つの園を一日ずつ体験するほうが将来を選択する際により役立つのではないか。このように体験の質から考えて積み重ねの意味を見直すことが、今後の検討課題である。

また、体験報告の形式についても、実習日誌の練習としてだけでなく、自分自身が考えるヒントを得るものにしていくために、4年間を振り返った1年生の声も取り入れながら見直すことも必要であろう。

② 器楽表現などの履修内容の見直し

1年生の場合、例えば器楽の授業でピアノへの意欲を失った学生は、ほとんど「バイエルをやらされるというのが嫌だった」とその原因を答えている。当時の器楽＝ピアノという考え方は何とも貧困であるし、バイエルが弾ければ伴奏ができるというのは、旧態然としている。保育の場で求められるのは、音楽する喜びを子どもに伝え、ともに楽しむことのできる教師である。

よりよい表現を生み出すためには、学生自身が音楽する喜びを感じた経験がなくてはならない。

秋田は、就学前時期に培われる社会情動的資質が、その子のその後の将来に関わることを指摘している。だからこそ、保育に関わる教師が、このような柔らかな情動や音楽的資質を、身につけていることが、子どもの発達の見通しをもつためにも重要だと考える。

本学科の器楽や声楽だけでなく、表現関係の授業では、実習前の科目で、「豊かな文化財に触れること」「仲間と協働する喜びを味わうこと」「自らの興味から出発した課題に取り組む」「他者と

の応答、表現を発表し、聴きあう場を大切にすること」を意識した授業内容や方法の改善を目指したい。

そのことが、実習園からの最終評価にあった「表現力が足りない」学生の実力の底上げにもつながるに違いない。

③ 実習前に、経験者の体験を聴く会を設定する

1年生が実習を終えたので、今後は、異学年の学生の体験を聴きあう会を授業の中に取り入れる。今回、2年生で試してみたところ、聞く2年生、話す4年生双方に多くの学びがあった。

今後は事前学習の中でも内容や方法、形態を工夫して異学年交流を取り入れていくのが望ましいと考える。

《注》

- (1) 秋田は「子どもの学びと育ち」、『教育の再定義』、岩波書店、2016、pp.111-115の中で、「社会情動的資質とは、課題を成し遂げるための意欲や忍耐強さや創造性、モニタリングやメタ認知能力、他者と協働的に働くためのリーダーシップや折り合いをつけるしなやかさ、自分の感情を統制する自己調整能力などの総称」であり、幼児期にはみえやすいが、大人になっての個々人の幸せや豊かな生活に関わるということがわかっている、と述べている。

参考文献

- 教育基本法（法律第25号）第2条、第8条、第10条
 佐藤学（2014）『放送大学叢書011 教育の方法』左右社
 谷川裕稔ほか（2014）『教育・保育実習ガイドブック』明治図書
 田中まさ子編（2015）『幼稚園・保育所実習ハンドブック』（株）みらい
 無藤隆監修（2017）『保育・教育実習テキスト』診断と治療者
 佐藤学、秋田喜代美ほか（2016）教育 変革への展望 1『教育への再定義』、岩波書房